

〔時還讀我書〕文政辛巳年四ノ二月中旬ヨリ、都下感冒流行シ、闔家コトクク枕ニ就ニ至レリ、西國ニテハ去冬ヨリ行レテ、邪氣盛ニシテ久解セザルモノアリト、關東ハ其證初起ハ稍劇ク、加進スベキ勢ナレドモ、略中然マ、餘邪留連スル者アリ、動スレバ吐衄血ヲナスモノ多カリシ、蓋近年感冒ノ流行病者ノ夥キコト、是歲ノ如キハ曾テ見及ザルホドノコトナリキ、

〔天保集成絲綸錄百六〕文政七申年三月

口達之覺

此節風邪流行に付、長髪に而罷出候儀、并供廻り等も格外ニ減ジ召連候而も不苦旨無急度御目付江申渡、大目付江も、右之趣相達候様是又申渡候事、

〔救荒便覽〕天保三辰年春寒甚しく、三月岐岨大雪、十一月琉球人來聘、寒氣つよし雪も度々、前月より疫邪流行、こゝに至りて止、

〔兔園小説五集〕安永以來のはやり風

今茲は秋のころに至りて、感冒必流行せんか、細人小兒おしなべて寢々轉々と謠ふこと、是病臥の兆ならんといへり、果して八九月の頃に至りて、風邪感冒流行して、良賤病臥せざるはなく、輕きは兩三日にしておこたるもありしかど、重きはその症、疫熱に變じたる、三四十日に至るもあり、或は庸醫に愆られて、よみぢ赴くものもありけり、このときのゑせ狂歌に、

はやり風無常の風もまじりけりねん、こゝろり用心をせよ

かくて病むとやむ程に、關の八州いへばさらなり、京攝の間まで、脱るゝものなかりしとぞ、童謠はいにしへより和漢の歴史に載せられて、應驗あらずといふもの稀なり、略中

子が東西をおぼえしころより、大約五十年このかた、時々の感冒に世俗の名を負はせしもの少からず、まづ安永の中葉にはやりし風邪を、駒風と名づけたり、こは城木屋お駒とかいふ淫婦